

民話や伝説でたどる

「宇都宮の千年」

〈宮ご〉のロマンをかきたてる、地域再発見

私たちが住んでいる宇都宮市は、長い歴史と豊かな文化を持っています。古くは万葉集に下野国から防人に行った人の歌が収められ、また古代から中世にかけては武士が活躍し、大和朝廷と東北との境界として重要な地域に位置づけられてきました。今回は、そんな宇都宮の歴史について、民衆の目線で伝える民話・伝説にスポットを当てて、地域の魅力を伝えたいと思います。



名所案内

観光ボランティアガイドの 大貫裕さん・有岡光枝さんと 歩く宇都宮

(下野民話の会)

林松寺

大貫 「この大谷石の塀は、大正15年に作られました。模様は、禪宗の寺で使われる窓をかたどったものです」



「宇都宮駅南東地区」に近い林松寺の大谷石塀

八日市場通りと不動尊

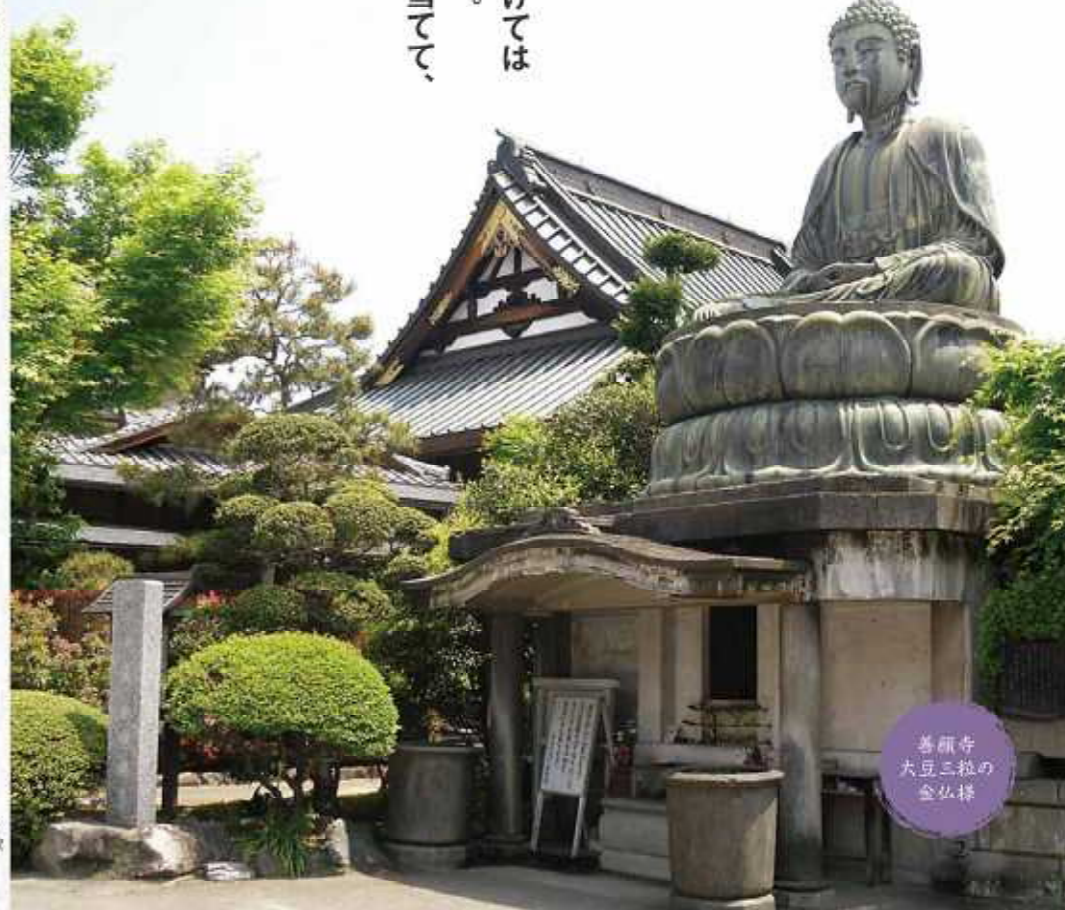
大貫 「宇都宮というと、日光街道にばかり目が行きがちですが、商人にとってはこの八日市場通りの方が、実は重要でした。田川に近いので、荷物の運搬にも有利です。ここから真岡、結城など他地域とのやりとりが行われていました。少し入ったところに、不動尊が今も町並みを見守っています」



八日市場通りにひっそりとたたずむ不動尊

善願寺

大貫 「善願寺さんは、やはり〈大豆三粒の金仏様〉が有名なもので、そちらばかり目が行ってしまいますが、そもそもの創建も延暦15(796)年と、おそらく宇都宮で最古の寺の一つなのです。創建したのは征夷大将軍だった坂上田村麻呂です。宇都宮が、当時の朝廷にとって、重要な場所であったかが、わかります」



善願寺
大豆三粒の
金仏様

796年に創建された善願寺の境内に立つ、銅造古形仏坐像

"1000 years of Utsunomiya"

ここで、「下野民話の会」の語りべでもある有岡さんに、その始まり部分を話してもらいます。

有岡 「大仏様は享保20(1735)年に、当時の住職・栄祐和尚とその弟子・貫栄が苦心して建てたものです。その苦勞が、民話の形でも残っています」

「むかし、むかし江戸時代のことだ。善願寺の栄祐和尚がな、火事や飢饉が続いて苦しめる人々の姿みてな、下野の国にはねえ、大仏様を建立して……」

大貫 「この像は、鋳造も宇都宮の職人が行っています。つまり、それほどの工業力を有する地域であった、ということも、重要なポイントではないでしょうか」

草結八幡宮

大貫 「名前の由来は、なぜか伝わっていないんですよ。宇都宮は戊辰戦争、太平洋戦争と二度の戦争で、重要な文化財や文書がかなり失われました。そういう事情もあって、分からなくなったのだと思います。何しろ、前九年の役(1051-62年)に源頼義・義家親子がここから出陣した、と言われているほど、古い八幡宮です」



草結八幡宮。前九年の役の時、源頼義・義家親子はここから出陣した

庇願寺

大貫 「創建は1181年で、約千年前。宇都宮城主三代目の朝綱が念仏堂を建立したが、始まりという事です。江戸時代初期、元和5年に現在の場所に移転しました」

有岡 「こちらには、身代わり地藏尊の伝説も『田うない地藏』『手負い地藏』という形で、今に伝えられています。どちらも、困っている庶民を地蔵が助ける内容で、寺が地域に尊ばれてきた歴史がうかがえます」



うつのみやシティガイドの大貫裕さん(左)と、「下野民話の会」の語りべ有岡光枝さん(右)

大貫 裕さん(おおのみち ゆたか)
うつのみやシティガイド協会 観光ボランティアガイド

有岡 光枝さん(ありおか みつえ)
うつのみやシティガイド協会 観光ボランティアガイド
下野民話の会 会員

押切橋

大貫 「田川にかかる押切橋は、住人の生活を支える役割を果たしていました。一時期、地名変更のあおりで橋の名称も変えられたことがあったのですが、誰も新しい名前では呼ばないので、いつの間にか戻ってしまいましたね。それほど、地域に愛された橋だという証明でしょう」

有岡 「田川には、郷土玩具や縁起物として市民に親しまれている「黄ぶな」が住んでいたという伝説があります」

「むかし、むかし、宇都宮でおつかねえ病気がはやっただと。高い熱が出て、体中にぶつぶつができてな、次から次に人とうつつてじくなってしまいう人までいたんだと……」



田川にかかる押切橋は、江戸時代から市民の生活を支えてきた



特産の大谷石で作られた石蔵も、市内の風物詩(写真は青源味噌蔵の蔵)

青源味噌

大貫 「宇都宮の老舗企業の一つ、青源味噌さんの石蔵です。市内にはまだまだこういった大谷石蔵が、たくさん残っていますね。宇都宮の街の景観の一部として、いつまでもなくならないでほしいと願っています」

おしどり塚

有岡 「鎌倉時代の「沙石妙」という仏教説話集に登場する、おしどりの伝説が残っています」

「むかし、むかし、鎌倉時代の始めの頃のことだ。宇都宮に求食沼^{あきくま}って大きな沼があつた、この沼から求食川^{あきくま}って川が流れて田川へと続いていたんだと……」



観光ボランティアガイドの大貫裕さん・有岡光枝さんと歩く宇都宮

「今、民話が注目されるわけ」

特別寄稿

宇都宮伝統文化連絡協議会 会長 柏村 祐司

民話とは

最近民話語りが盛んである。栃木テレビでも今年の一月から民話語りの放映を始め好評を博している。ところで民話とは民間説話の略語であり、本来、「桃太郎」や「笠地蔵」の話のように、時代、場所、人物等が特定されない昔話を言う。それに対し「釣り天井」や「亀井の水」のようなあたかも史実がごとく伝えられた話を伝説と言う。「語り」として伝えられたのは、昔話であり、一般的には夜、開炉裏端で年寄りが子どもたちに語ったものである。一方伝説は、「言い伝え」として断片的に伝えられたものである。

それが今や昔話とはより伝説、さらには木下順二の「夕鶴」のような創作民話を含めて民話と呼んでいる。民話は今や百花繚乱の時代でもある。

文字化された伝説 無視された昔話

昔話と伝説、真っ先に文字化されたのは伝説である。明治期以降、政府をはじめ各行政で地誌編さんが行われるようになる、伝説が取り上げられた。そして断片的に伝えられてきた話が執筆者によって書き加えられ、一つの物語として作られ

た。それが今日伝わる伝説である。今日、伝説集が出版されていない行政体は無いくらい伝説集は数多い。

一方、土地にまつわらない昔話は、地誌編さんにはなじまず、また、現実離れた昔話は、まさに子どもだましとして多くの地域で文字化されずに消滅していった。栃木県内では、県北の山間地や八溝・足尾の山間地で遅くまで昔話が伝承されてきたが、本格的な昔話集は小堀修一の「那珂川流域の昔話」(三弥井書房)それに筆者の「栗山の昔話」(随想舎)くらいである。

栃木県の民話

前述したように、栃木県における昔話の伝承は希薄で、そのうえ文字化されたものも少ない。県内で広く語られた昔話は、猿や蛇が娘と結婚する「猿婿入り」「蛇婿入り」、若嫁が大きな尻をする「尻ひり嫁」それに「愚か婿」の話である。このうち「愚か婿」の話は、別名「栗山はなし」という所が多い。昔話は語り始めと終わりに、一定の言葉を用いるが、県内ではそうし

宇都宮(二荒山)神社

有岡 「宇都宮城主が戦いで負けそうになった時に社人が助けに来たという伝説が残されており、大変に神聖な場所だと言っています」

「むかし、むかし、平安時代の終わりのころのことだ。戦勝祈願した、藤原宗円^{とうげんむねのり}が、その功績で宇都宮大明神の社務職となったんだと、そこで、三代目の朝綱公^{あそむねのつね}から、宇都宮朝綱^{あそむねのつね}が宇都宮家を名乗るようになったんだと……」

「また周辺地域にもたくさん伝説があります。近所に鏡ヶ池や百目鬼通りという変わった地名があります。これも、二荒山神社に深い関わりがある伝説が、元になっています」

まとめ

宇都宮の歴史、文化的な豊かさや伝わってくる、市内散策でした。大貫さん、まとめをお願いします。



一番町の「おしどり塚公園」内にある、おしどり塚



宇都宮(二荒山)神社

宇都宮の歴史や文化のシンボル、宇都宮(二荒山)神社

"1000 years of Utsunomiya"

た形式は、わずかに栗山で伝承されてきたにすぎない。栗山では、「むかしあつたぞ」で語り始め「いちがさきはざつとおい申した」で終わるのが多い。栃木県で民話といえば伝説が一般的である。伝説は古くから政治・経済・文化が発展してきた歴史のある土地ほど多く、県内では日光市、足利市、宇都宮市に数多くの伝説が伝えられている。



藤原 日中 作

栃木県を代表する伝説に、「戦場ヶ原の由来」「殺生石」「釣り天井」「大寺の七不思議」がある。戦場ヶ原の由来は、もともと「日光山縁起」に記されたもので、男体山の神と赤城山の神とが大蛇とムカデとに姿を変えて戦う壮大な話である。釣り天井の話は、江戸時代宇都宮藩主本多正純の宇都宮城の改修にまつわるもので、正純の失脚で生まれた話ともなり伝説化された。大中寺の七不思議は、太平山麓の曹洞宗の寺にまつわる名刺ならではの話である。

大貫 「豊か、といえば、特に江戸時代以降は商人の町としても栄え、幕末には「宇都宮240家の豪商」とまで言われていました。500万両もの備蓄があったとも、伝わっています。その財力を背景に、明治から昭和までの動乱の時代を乗り切り、宇都宮を栄えさせてきたと言ってもいいと思います。そういった時代背景などにも、ぜひ思いをはせながら、歩いていただきたいですね」

宇都宮市では、「釣り天井」の他に「亀井の水」「大豆三粒の大仏」「おしどり塚」「黄ぶなの話」「大谷寺の由来」「羽黒山のいだらぼうし」「関白獅子舞の由来」などが知られる。黄ぶなの話は、宇都宮を代表する縁起物の「黄ぶな」にまつわる話であり、その愛らしい形から市民に親しまれ、街中を循環するバスの愛称にもなっている。このほか最近とみに人気があるのが宇都宮市立城山西小学校校庭にある「孝子桜」にまつわる話で、西小学校地域住民の厚い郷土愛が話の普及に輪をかけている。

活躍する宮の語りべたち

宇都宮市内には、筆者が知っているだけでも五つの語りべの会がある。そのうち下野民話の会、野州語りの会、栃木の民話語り・かまどの会は、「宇都宮伝統文化連絡協議会」に属し、毎月第一・第三土曜日の午後二時半から一時間、「旧篠原家住宅」で定期的に民話語りを行っている。また、観光案内に民話語りを取り上げている観光ボランティアもいる。

一生懸命に民話を語る語りべたち。百人いれば百様の語りがあり、個性豊かな語りが展開する。それぞれが民話語りの魅力でもある。お聞きなされたし。

宇都宮伝統文化連絡協議会 会長 柏村 祐司(かしむら けうじ)

昭和19年宇都宮市生まれ。育つ、横っ坊の「宮つこ」長らく栃木県立博物館に学芸員として勤務。その後、伊豆の島を転々とする。現在宇都宮伝統文化連絡協議会会長、栃木県民話の会連絡協議会会長、栗山町の文化財保護協議会委員等をつとめる。

「宮」に語り継がれる 心温まる民話

〈昔〉を知れば〈明日〉が生まれる

幼いころおじいさんやおばあさん、そして両親から一度は聞いたことのある民話を集めてみました。街中にある史跡や言い伝え、通りの名前などひとつひとつに、先人から語り継がれたお話しがあります。これらの民話を大切に、子々孫々へ伝えていくことが文化の原点ではないでしょうか。



民話

古くから宇都宮に語り継がれる民話

大豆三粒の大仏

宇都宮市栗瀬町

宇都宮駅近くの田川べりに善願寺というお寺があつてな。その境内に、高さ五メートルほどある美しい大仏様があるんだよ。「大豆三粒の大仏様」といってよ、こんな話があんだよ。

むかし、この田川べりに大変なはやり病が出てよ、子どもやお年寄り、はては働き盛りの人まで死ぬようになってた。おまけに日照り続きでよ、作物は取れず、村人たちは食べるもんもろくになくなつちま

たと。泥棒や追いはぎ、辻切りなどが増えてよ、それはそれはすさんだ暮らしになつたと。

和尚様は一心にお祈りを続けながら、人々を救う手だてはないものかと考えた。「そうだ、この地に大仏様を造り、みんなの心を一つにしよう。」

と思ひ立つてな、弟子や檀家の人たちに話したよ。「大仏様を造る目標ができりや、みんなの心が一つになる……。」

「み仏が村を守ってください。」と、心から賛成してくれる人もいたが、「今はそれどころじゃねえ、協力してえのは山々だけんど、病人かかえて食うもんもねえ始末だあ……。」という人もいたよ。

和尚様は弟子をつれて毎日托鉢に出て、人々に説いて廻つたと。しかし、どの家もどの村も貧しくてな、浄財は思うように集まらないま、年月ばかりが過ぎていったよ。

ある冬の寒い晩方のことだ。ひとりの旅の僧が現れてな、「私は諸国を廻っている旅の僧です。今晚一晩泊めてください。」

「お、お、旅の僧とな。」和尚は喜んで中に入れてやつたと。そんな夕食を振舞いながら、すさんだ村の様子や、大仏様を造つて村人を救いたいことなどを話したよ。

すると、僧はな、「私は旅の僧の身で何からお役に立つことはできませんが、ほれ、ここに大豆が三粒あります。これを大仏を造るたしにしてください。」

和尚が当惑していると、僧はさらに、「春になったら、この三粒の大豆を境内にまくのです。秋には百粒ほどの大豆がとれましよう。次の年、これを信者に一粒ずつ分けて、そこから取れる大豆の一部をお寺に寄付していただくのです。次の年もまた実つた大豆の一部をお寺に寄付していただく……。これを十数年続けたならば、



その大豆からの収益は驚くばかりになるでしょう。」

和尚は顔をほころばせて、「いかにも仰せの通りです。なぜそれに気づかなかつたのか……。」と、合掌して感謝したよ。

旅の僧は、次の朝早く、名前も告げずに旅立つたよ。

和尚は直ぐに実行に移したよ。毎年毎年、信者や農家を巡つて大豆の種を渡してな、協力をお願いしたよ。

そして、ついに、立派な美しい大仏様が出来上がったよ。和尚が大仏様を造りたいと思ひ立つてから、何と二十年もの年月が過ぎていったよ。

この話が見えよう、お参りして願ひ事を叶えていたたこうとな、たくさんの方がやってきました。いつの間にかこのあたりはにぎわい、平和な暮らしになったよ。

この大仏様は、「大豆三粒の大仏」と言われ、人々に親しまれてきたよ。

これでおしまい(再話/柴田ミチ子) ◆参考文献「宇都宮の民話」宇都宮市教育委員会 宇都宮市教育委員会社会教育課編

黄ぶな物語

宇都宮市西原町

むかしむかしの宇都宮はな、田畑が広がって、水のきれいな小川や池が沢山あつたよ。子どもたちはな、沢ガニやフナを獲つては、元氣いっぱい遊び回つていたんだよ。お母たちは、その小川でな、野菜や茶わんまでも洗つていたんだよ。じいさまやお父たちもひまを見つければ田川に行つて、魚を釣つては隣近所に配つてな、晩飯のおかずにしたよ。まるで村のみんなはみんな親せきみてえに仲よくくらしていたんだよ。

ところが、村ん中におつかねえはやり病が広がって、高え熱が続いてよ、体じゅうはできもんだらけになつたんだよ。小さな子どもや、じいさんばあさんが次々に死んでしまつてな、毎日村のどこかで葬式があつたんだよ。

今でいう天然痘という、人にうつる病気のことなんだがな、病のこともなんもわからねえし、薬もなかったんだよ。村のみんな、病気の家には近寄らなくなつてな、みんなうちの中ではやり病にならないようにお祈りしていたよ。子どもの遊ぶ声も聞けねえし、村は静まりかえつてしまつたよ。

ある日、信心深え若え夫婦の息子が、はやり病にかかつてしまつたと。高え熱が続いて、だんだんやせ細つちまつたと。お母が「坊やどうした。元氣をだしておくれ。」声かけても答えねえで、泣きながら暮らしたよ。

「そつだ、生きのええ魚を釣つてきて、な」とか坊主を元氣にしてやんべ。」

お父はすぐに田川に行つたんだよ。その



日は、一匹も魚はかからなかつたよ。

「仕方がねえ、また明日にでもくんべ。」

するとそんな時、竿がぐいと引張られたよ。上げてみるとよ、今まで見たことのない黄色いでつけえフナがかかつていたんだよ。「これはめずらしいしいいフナだ。神様の贈り物かもしんねえ。」

さつそく息子に食べさせると、その黄色いフナを喜んで食べたよ。

なんと次の日にはな、熱がすっかり下がって、おできもなおり始めたんだよ。そのうわさが村中に広がってな、みんな田川に黄色いフナを釣りに出かけたよ。

しかしな、黄色いフナはなかなか釣れなかつたよ。そこで、はやり病がなおつた村人がお礼に張子の黄ぶなを作つて、軒下につるすと、はやり病がいつの間にか無くなつたよ。

今でも病氣にかからないように、正月初めや二月十一日の初市に買った張子の黄ぶなを軒下につるしてな、その後神棚に供えるようになったんだよ。

おしどり塚

宇都宮市(番町)

黄ぶなはな、今では宇都宮の郷土玩具として、みんなに愛されているんだよ。その上、黄ぶなのバスもできてよ、宇都宮の人々の足になつていっているんだよ。これでおしまい(再話/仁平恵美子)

黄ぶなは、宇都宮を代表する郷土玩具です。本来は、農家の副業に縁起物として作られていたそうです。

上げてみるとよ、雌のおしどりが雄の首を大事に抱いていたんだよ。狐師はおしどりを持たまま、立ちすくんでしまつたよ。「あ、おらは、何て罪深えことをしちまつたんだべ。」

狐師は、頭を丸めて坊さんになり、川岸に塚を造り、石の塔を建ててな、おしどりの菩提を弔つたよ。

今でも、大町の民家の裏手にはよ、おしどり塚があんだよ。

これでおしまい(再話/郡司紀子) ◆参考文献「宇都宮の民話」宇都宮市教育委員会 宇都宮市教育委員会社会教育課編



1000 years of Utsunomiya



親と子で語る うつのみやの民話
栃木の民話語りかまどの会
宇都宮の土地にどっしりと根を生やし、語り継がれる民話 45 話を再訪。先人の遺言である民話を通して、郷土の伝統文化を守り継ぐ。民話の心の故郷である。
発行・種類番 2028(616)6605
定価 1,050円(税込)
◎県内主要書店でお求めになれます。